

キモチ

弦楽器イルカ



核の子どもたちはみな
・その他の断片

■当日■

雪の降る中、自宅マンションまで歩いて帰った。避難所の天井を見上げて、いつ果てるともない余震に怯えていた。寒さに耐えかね、布団を持ち込むためマンションへ戻った。裏口から入ってエレベーターの前へ行き、慣れた手つきでボタンを押す。

違う。まただ。軽く舌打ちする。停電に気づくのも3度目だ。自分の馬鹿さ加減にあきれながら階段へ、6階まで登りながら何気なく空を見上げたときだった。音のない闇に信じられないほどたくさんの星が浮かんでいた。

単純に、きれいだと思った。

その瞬間にもたくさんの命が亡くなっていたかもしれないのに。停電にも不幸中の幸いがあるなんて思いがよぎった。

星はいつもそこにあっただはずだ。ただ人間の無自覚な欲望の照明がその一粒一粒をかき消してただけだ。良くも悪くもそれが当たり前で成り立っていた。星をかき消すほどの明るさについて何か考えることがあったにしても、その光を生み出す火が自分たちの脅威になる日が本当にやって来るとは考えてもみなかった。

■1日後■

この期に及んでフィクションを語る意味なんてあるのだろうか。

手回し式ラジオや携帯のワンセグから細切れの情報を得た。少しずつ明らかになる状況の中、思い出したのは村上春樹の「かえるくん東京を救う」だった。地下の闇の中で人知れず「みみずくん」と戦うかえるくんの話だ。かえるくんは戦うたびに疲弊して傷を負い、みみずくんを倒した最期には体内から大量のみみずが溢れ出すおぞましい死に様を主人公に見せつける。

この世界はそうやって誰も知らないところで戦う誰かに守られている。まさにそうだと思った。村上春樹は、オウム事件のとき「やみくろ」という自身の創作したキャラクターがまるで現実に現れたかのように感じた、と語っていたはずだが、かえるくんもまさに今までたくさんの原発に従事し亡くなった作業員達そのもののようには思えた。

かえるくんは死んだ後すぐに、主人公の目の前から消え失せてしまう。何もかも夢だったかのように。だが、この今になって僕は思う。遺体のおぞましさを証拠としてさらし続けなかったからこそ、人々はその恐怖を自分のこととして取り合っただけで来なかったのだ。

今、かえるくんがもし僕の家に来たら彼は何と言うのだろうか。

それが僕なりの物語に対する答えのような気がした。

■1週間後■

まるで死後の世界みたいだ。

確かに今までも、この瞬間実は死んでいるのかもしれないと空想して語ることはあった。突然何が起きるかわからない不確かな生だからこそ、自分にとって最も大切なことを常に意識することが重要だと考えていた。だが、ほんの数日前まで当たり前だった日常がガクンと狭められ、疑いもしなかった将来がじりじりと蝕まれていく今、まさに、この瞬間。

「生きながら死んでる」

「え？」

5歳になる息子が不思議そうに私を見上げている。

「いや、なんでもないよ」

妻と息子は温泉が大好きで、落ち着いたらすぐにでも連れて行こうと思っていた。いつかではなく。出来るだけ、少しでも早く。

久々に暖かいお湯に触れ、息子はその広さに興奮を抑えきれず、バチャバチャと踊りながら浴槽を歩き回っている。昨日、復旧したばかりという山の中の温泉宿へ辿り着いたのが15時過ぎという早い時間だったため、男湯には私たち親子しかいない。

「ペーンちん、ペーンちん」

ペンギンの真似をして両手でお湯をバチャバチャと跳ねながら行進を続ける息子の背中を、ぼんやりと眺める。

まだ、一週間だ。

窓の外では粒の大きな3月の雪が静かに降っている。一週間前ならきつと、ただ綺麗だと見とれていただろう。その雪の冷たさに凍える人々のことなど思いつきさえせず。広い湯船に並々とお湯が注がれ、シャワーをひねればお湯が飛沫を上げる文明がこんなにも魅惑的で、同時に悪魔的な恐ろしさを秘めていることにもまるで気付かずに。

息子は頬を上気させながら既に4周目のペンギン踊りを始めている。更に次は両手を前に突き出し、「ワニさんだー」と言いながら、ワニさん踊りを始めた。

自分だけがこんな所にいていいのだろうか。未曾有の出来事に誰もが混乱しそれぞれの苦悩を重ね合わせすり減らした一週間を経て、偶然と恩情がクモの巣のように絡まり私をすくいあげ、気づけばここにたどり着いてしまった。

うまくやった。あいつだけ。逃げ出した。弱虫。運がいい。裏切り者。カワイソぶって。自分だけ被害者面して。口ではああ言うけど。鬱。男のクセに。騙された。賢明だな。なんでこんな目に。

もちろん、誰もそんなことは口にしない。ただ、自分を責め続ける私が周囲の目にその言葉を見つけるだけ。誰もが私を嫉み妬み恨み責める悪人だと妄想する自分に、更なる嫌悪感をもよおす。そして死にたい、と呟いて安心する。いつもの繰り返し。

目を上げると、息子が踊りをやめ、うつむいて浴槽のへりをなぞっている。

「どうした？」

「パパ、怖い顔してた」

口元に引っかけた笑顔が行き場をなくし、うつむいていた息子がふてくされて上目づかいで私を睨んだ。

「そうか、ごめんね」

「パパ、怒ってる？」

「怒ってないよ。本当にごめん。考え事してただけだよ」

「パパいつも考え事してるね。怖い」

「怖いか。ごめんごめん。本当に怒ってるワケじゃないよ」

申し訳ないと思う。ふと、お昼に旅館で作ってもらったうどんをかきこんだ息子が、「世界一お腹いっぱいだ」と喜んでいたことを思い出し、こみあげそうになる。

「そっか。あのね、天気もね、怒ったり笑ったりするんだよ」

いきなり話が変わり、私は可笑しく思う。

「そうなんだ」

「うん。晴れてるときは、うれしいの。曇ってるときはね、困ってるの。雨の時は泣いてるの」

「じゃ、怒ってるときは？」

「うんと、雷。怒ってるときは雷なの。それでね、地震のときはね、イヤだイヤだって、地球がバタバタしてワガママ言ってるときのなの」

息子が地球という言葉を的確に使えるようになっていたことに私は驚く。この一週間、いまだかつてなく濃密に協力し、そして何度もぶつかり合い口論した妻の言葉を思い出す。あなたは何も見ていない。ひいクンがあなたの目の色ばかり窺う子供になってしまったのに、全然気づこうともしない。

「ひいクン、大きくなってたんだね。パパ、気付かなかった。ありがとう、ひいクン、パパを励まそうとして、ペンギン踊りしてくれたんだね」

「あとワニさんね。ワニさん踊りね」

「そうだね。あのさ、ひいクンホッペ赤いから、少し上がろうか、のぼせちゃうから。パパの隣に座ろうか」

そう言って浴槽のへりに二人で腰かけ、雪を見た。

「温泉、楽しい？」

「うん。パパありがとう」

約束を叶えてあげられたことに、父親として良かったと思う。そしてもう一つ、私は叶えてあげたい約束を思い出す。いつかではなく、できるときに必ず。

「あのね、ひいクンに聞いてみたいことあるんだ」

「なに？」

「いつかね、まだまだずっと先だけどさ、ばあばとじいじが九州に帰ったらさ、ママも九州に帰りたいんだって。もうどうしても、こっちには長くいたくないって。いろいろ、壁とか天井落ちてきたりしたもんね。まだガスも点かないしさ」

「うん」

「それでパパはこっちに残って、ひいクンとママは九州でじいじとばあばの近くで暮らすの」

「いいね、いつ、明日？」

「いや、ずっと先だよ。でも、それでもいい？」

「うん。いい。ばあばとじいじとママと遊ぶ。パパは？」

「パパは、たまに帰るよ。それでいつか、パパも九州へ行けるように頑張るよ」

「うん。じゃ、ひいクンがママを守るからね」

うん。そうだね。

言葉にすると再びこみ上げてきそうで、それを飲み込む。妻と約束したいつかは、先延ばしにせずたとえ苦労しても叶えると決めた。

あの長い恐怖の間、必死で床に這いつくばり「お願いだから止まってくれ」と祈り続けた。こんなところで死にたくない。家に帰りたい。家族の顔が見たい。まだまだたくさん叶えてない夢がある。叶えるまで死にたくない。

「ひいクンね、また踊りたくなっちゃった」

「ん？そう？じゃ、のぼせないように気を付けてね」

「うん」

息子はそう言うと湯船へまた入って行き、「ペーンちん、ペーンちん」とやり出した。
「パパもやって！」

「そうだね。どうやるの、教えて？」

「うんとね、両手をペンギンにして、こう。後ろから来てね」

息子の小さくもしっかりとした背中と、水をぺちぺちと叩く細い腕の白いしなやかさを見つめる。

「こうだよ、ペーンちん、ペーンちん」

「うん。ペーンちん」

次のペーンちんはかすれて言葉にできず、天井を見上げた。すみませんと、いつもの口グセがぐるぐる回る。すみません、自分だけ、すみません、カワイソぶって、被害者面して、うまくやって、すみません、逃げ出して、弱虫で、裏切って、運を利用して、悪態ばかりついて、すぐ落ち込んで、すみません、男のクセに、騙して、ずるくて、置き去りにして。

どうせ最後には自分を許すのを知っているのだ。仕方なかったんだと甘やかすに決まってる。

見上げた天井には白い湯気が溜まっている。先の見えない未来のようでもあり、そこから今もあの蒸気と闘っている人たちのことを思い出す。処分できず溜まり続け、必ず誰かが傷つく事実から目を背け、利権や発展のため手に入れようとした力。

結局はこの国の大人、一人一人に責任があるはずだ。結果的に誰もそれを止められなかったからだ。しかし関わった人間から順に取っていくはずの責任は手つかずのまま、子供たちの頭上を右へ左へたらい回しにされている。子供たちのために、誰もが自分の責任を果たさねばならない。私も戻るだろう。あの沿岸部に。たくさんの方が亡くなった。あの日、もし居場所が違っていたら。何度も考えた。

のぼせた子供を拭きながら、まとまらない頭で、ただ明日のために身体を休めようと風呂からあがる自分がいた。予定調和と言われればそれまでだ。

それから数日して私は沿岸部へ行き、変わり果てた景色に愕然とする。そう言えばと思い出して振り返っても、目の前のガレキが一瞬では理解できない。もちろん、そういう体験は日常でもある。ちょっと前まであったはずの建物が駐車場に変わっている違和感と、乱暴に言えば同じはずだ。ただ、目に映るほぼ全てが一変している。

そこに暮らしていたワケでもない私が、この現状を目の当たりにしていったい何を書くと言うのだろうか。何も書く必要なんてない。そう思った。

■ 2週間後 ■

姉と電話する。姉は明るい口調で、「大丈夫、全然心配してないよ」という。福島は全く安全だと。それから今年小学6年生になる息子が夕方、グラウンドでサッカー練習をしていると知らない大人から怒られたのだと話を始める。ナイター照明をつけて練習してたから節電のことで怒っているのか、または子供たちの健康のことで怒ってるのかしらないが、余計な御世話だと姉は言う。国の基準がおかしいんだよ。全然問題ない数値なんだよ。このせいで生まれ育った福島を差別したり風評を広める人たちのほうがよっぽど許せない。

そうだね、と私は言う。ひどいよね。

そう言いながら私は、風評じゃないんだ、と思う。数値はどうあれ実際に漏れてるんだ。それはやはり事実で、答えはずっと後に出る。煙草だって酒だって感受性が強いヤツと弱いヤツがいる。統計がそれを証明するように、今回その被験者に選ばれたのが我々だったってだけだ。

だが、そんなことは言えない。ただ笑って、きっと大丈夫だよ、と繰り返す。

水戸に住む兄の義父が亡くなったので、通夜と告別式に出たかったのだが姉も忙しく、結局6月に行こうということになった。

■ 1ヶ月半後 ■

GWの沖縄は雨だった。こんなに早く梅雨入りするのは10年ぶりらしい。肌寒い曇天が続きとても入れる海温ではなかったが、それでも激しい雨もほとんどなく晴れ間には蒸し暑さも感じられた。本来は夏休みにどこかの海へ行こうと決めていた旅行だった。

実際、海には浸かる程度で屋内の温水プールで泳いでばかりいたが、それでも息子は楽しそうだった。たまに激しい雨に降られたり、免税店に行くかどうかで妻とは相も変わらず、しかし壮絶なケンカをしたりもした。生き残った時はあんなにも互いの命がありがたかったのに、ただ生き続けるだけではやはり足りないのだ。うまくいかない。

それでも沖縄は距離以上に遠くそれまでの現実から離れて感じられ、全てが起こる前の普通に生きていた世界へ戻った気がした。

■ 2ヶ月後 ■

姉と電話する。姉は、息子がサッカーをやめたと言う。「なんか飽きちゃったんだって。やりたくなくなってきたみたい。もうやめたいって」。甥がついこの前、サッカーでレギュラーになれたことを興奮した様子で電話してきたことを思い出す。「そうなんだ」「うん。別に無理にやらせるつもりもないしね」

それ以上、何も聞かなかった。

サッカーもなくなったので、夏休みは母親が避難している関西へ息子と遊びに行くと言っていた。

■ 核の子どもたちはみな ■

逃げられないんだ。

もちろん、どこにいたって不幸はあって、みんな逃げられない不幸をしょってる。でも、みんながどうか言いたいんじゃない。福島に、東北にいて、本当はすぐにでも逃げたいのに逃げることができない。

「元に戻りたい」だなんて、そもそも自分たちが恵まれていると錯覚してただけだ。ほんの60数年前は戦争で焼け野原になり、原子爆弾でたくさん人間が死んだ。そこから復興を果たしたように思っていたが、結局は動脈硬化したシステムと、老朽化した原発という悪性腫瘍を抱え、様々な手術を拒んできたのがこの国の現在だ。盤石に思えた元の平和な社会は、しょせんその薄氷の上に築かれていたにすぎなかった。そんな上辺だけの安定がいつまでも続くワケがなかったのだ。

今この瞬間も世界中で飢餓や空爆やテロで苦しむ人々がたくさんいる。この国では内

紛も自爆テロもそう起こらないが、かわりに天災と原発があった。これまで恵まれない人々を見殺しにしてきた。沖縄も見て見ぬふりをした。だから次の見捨てられる番が自分たちに回ってきただけだ。

それでも頑張ろうとか、生きていけばいいことがあるとか、人生は素晴らしいとかの言葉は、強い側の人間が弱い人間をコントロールするために使われる。「右の頬をぶたれたら左の頬を差し出せ」と、ぶつ側がニヤけながら命令するのと、ぶたれた人間が皮肉まじりに叫ぶのでは全く意味が異なるように。いつでも逃げられる人間の「一緒に頑張ろう」と、どこにも行けない人間の「一緒に頑張ろう」は、まったく次元の違う決意だ。

そして「頑張れ」が世間に広まるほど、逃げる者を監視する、避難することを許さない風潮が生まれる。「自分だけ生き延びようとししないで、死ぬときはみんな一緒に」。それが今や無神教のこの国にはびこる、世間体という名の宗教の正体だ。

■夢■

「別にいんだげんちょも。どうせ夢だしない」

かえるくんは俯き加減に、どこを見ているのかよくわからない目つきでそう言う。「何のためさアンタんとこ来たか、オレも分がんねけど。特に用事さあるわけでもねえし。別にさすけねしな。ひとんじ闘ってとちょっと応援してくんねがいと、オレのこと忘れねえでけれとか思うげんちょも」

沈黙。

「いや、んでねな。正直、分がんねべした」

丸い指先で目をゴシゴシこすりながらかえるくんは言う。少し声が大きく、震えている。

「ホントは怖えんだ。恐怖は迷いから来んだで。分がんね。なしてかえるが人間さ助けてんだか。自分の命をこっだら犠牲にして、理由がねえべした。人間は今日も平和に目の前の欲望さ、しがみついてるだけだべした。

井の中の蛙、大海を知らずって、ただ空の青さを知るって言うべ。んだからオレは田舎の空の高さや青さを知ってっぺした。憧れの海からどれだけ離れてっが、その距離を知ってっがら今がどんだけ恵まれてっがに気づぐんだべした。でも、それもすぐ慣れっがらない。憧れが日常に変わると、すぐ目の前の欲望にとらわれて忘れっがらない。手放したくないと保身に走っがらない。

んだでハァ、ホントはアンタに教えてほしんだ。オレがみみずくんと闘う理由さ。アンタたちのために命を投げ出す理由さ」

僕に何が言えるのだろうか。謝ることはできない。謝罪は偽善になる。だがここで感謝の言葉に意味があるのだろうか。しょせん他人事になりはしないだろうか。本当に、闘ってくれてありがたいと思う。僕は自分が恵まれていると口では言っておきながら、平和が壊れ始めてからやっと何も分かっていないことに気づかされた。

そこで不意に思い出す。院内の壁にかかっていた色褪せた写真、有名な若手女優が数年前、ロケでここへやってきたときに撮ったのだと職員の方が嬉しそうに教えてくれた、道路を挟んですぐ向かいが海に面していた病院、入院患者を助けようとした職員も含めほとんどが亡くなった。それから、浸水地帯の真ん中で何もかもが寸断される中、すぐに近隣住民を受け入れ医療行為を続けた病院。それら大きなメディアがほとんど報道しな

い、たくさんの小さな営み、確かに起こった出来事と想いを前にして、より小さい芥子粒ほどの自分がいったい何をしたいのだろう。

「闘ってほしい。もしかえるくんが死んだら、それは僕らの責任だ。僕らのためにかえるくんは死ぬんだ。そしていつか、僕も自分たちのために闘って死ぬ日が来たら、そのときは同じように逃げずに立ち向かうんだと思う。だから僕ら人間のために、闘って死んでほしい」

かえるくんは俯いたまま、頷くでもなく沈黙している。

「んだない。分がっだ」

かえるくんはそれだけ言うと僕に背を向け、窓を開けて外へぴよんと飛び降りた。「ただ、これだけは言わせてもらうげんちょも。みみずくんだって別に悪いヤツじゃねえべした。アンタ知ってっが？被災地の生ゴミを処理するために、たくさんのミミズが沿岸部に送られてんだぞい。あいつらは土をきれいにして肥料まで作る、そういう良い面もあんだべした。ただまあ、それぞれにいろんな事情があんだべな。つまり、役割のようなもんがさ。

まあどっちにしろこれは夢だがらない。そのうち醒める夢だべした」

そう言っにかえるくんは闇に消えた。窓はいつまでも開け放たれたまま、僕はその夢から醒めるきっかけを失い、今もまだ風に巻き込まれている。

■ 6月29日 または 現在 ■

蜂蜜のスプーン一杯は、一匹の蜂が一生かかって取る量だと聞いたことがある。なんの気もなく一生をぱくっと口にして、それが自分の役割だと思ってきた。しかし、本当は違うのかもしれない。タコを茹でるなら水から、徐々に温度を上げるといつしか逃げられない熱湯になって茹で上がる、と聞いたこともある。もしかしたらそれが我々の役割なのかもしれない。ただ、子どもたちにその役割を担ってほしくはない。

あるいは役割ということで一つ提言させてもらうなら、30歳を過ぎた男性は原則、福島へ作業員として数か月なり徴兵される制度を設けるべきだと本気で思っている。原発以外に、住宅地の除染作業もある。人手はいるはずだ。推進派も廃止派も、福島を共有することで発言が重くなると思うからだ。とはいえ、とにもかくにも相変わらず、世間は今日も平和な顔をしたままだ。

昨年末からの約3ヶ月間はとても楽しかった。思いつきが文章になるのが自分でも面白くて、できることなら他人と小さな風穴を共有したいと思った。誰もが思っているのにやらないことや、イライラするほど遅々とした日常を壊したかった。しかし結局、退屈な日常を壊したのは残念ながら私ではなかった。そして当然のように楽しい時間はあっという間に過ぎ去り、私の中にあっただけの物語は軽く吹き飛んで消え去ってしまった。

その程度の物語しか私にはなかったということだ。仕方ない。無限に近い広大な宇宙の、永久ともいえる時間軸を前に、点にもならない私のつまらない生だ。だが、まだ生きている。なぜか生かされている。

私が声を上げたところできっと、今まで通り何も変わらないかもしれない。だが私は声を上げたいのだろう。どのような手段か分からないが自分なりの声を上げるために、私は生かされていると思いたいのだろう。そして、あなたにもそうあってほしいと思って

いる。生かされているあなたが、自分たちのために何らかの声を上げることを、私は待っている。たとえば、岡本太郎の作品に付け足しをしたあの芸術集団のように。

彼らは原作に敬意を払っているし、売名することで自分たちの支援活動をより大きくしたいという大義名分もあっただろう。ただ私の理想を言えば、原作の倍はデカイ壁画を描いて太郎の上に貼り、それを後日ジグソーパズルにして1ピース500円で売り義援金にする、そして復興を遂げた福島でいつかそのピースをみんなで持ち寄って一つの絵に戻そう、と提案してほしかった。

そうやって自分なりに将来を考え声を上げるたくさんの人々が互いに議論し合えば、それだけで新しい物語が生まれるだろう。誰かが何かしてくれるのを眺めているだけでは、また他人の都合いい物語に流されるだけだ。

逃げられないなら立ち向かうしかない。子供たちを守るために、出来ることをやるだけだ。そこでもしフィクションが必要になったら、自然と語り出すだろう。願わくばそのうち、生の世界を物語れるようになればいい。今はただ、そう感じている。